L3T/L3TK/L3TF

本科０期２月度

解答

Ｚ会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

4章

【問題】（演習）

出典…陶淵明『飲酒』其十一　／　神戸大学

書き下し文

顔生仁を為すと称せられ、栄公道有りと言はる。屢しば空しくして年を獲ず、長に飢えて老に至る。
身後の名を留むと雖も、一生亦た枯槁す。死し去りては何の知る所ぞ、心に称ふを固より好しと為す。
千金の軀を客養するも、化に臨んで其の宝を消す。裸葬何ぞ必ずしも悪しからん、人当に意表を解すべし。

現代語訳

顔回は仁を行ったと称えられ、栄啓期も道を体得したと言われた。
（しかし、顔回は）いつも飲食に事欠き長寿を得ることができず、（栄啓期も）いつも貧困のまま老年となった。
（二人とも）死後に名声を残したけれども、一生枯れひからびていた〔＝痩せ衰えていた〕。
死んでしまったら（名声が残っても）何がわかるだろうか（、何もわからない）。（だから、生きている間に）自分の心が満足するのがやはり良いと考える。
（また、）肉体を千金に値するものと見て、客をもてなすように大切にしても、死んでしまえば肉体というその宝そのものが消えてしまうのだ。
（だから、）裸のままでの埋葬が、どうして悪いばかりであろう（、いや、悪くはあるまい）。人は、その真意を理解するべきだ。

解答

問1 (ア)　**問2** 飢〔第4句〕　**問3** しんごのなをとどむといえども

問4 死んでしまえば、どうして後に残った自分の名声などわかるだろうか（、いや、何もわからない）。〔解答例〕

問5 裸葬は、人が死によって名声も肉体も意味を失うという死生観の現れであり、作者もまた、生自体の充実を重視しているから。〔57字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…梅堯臣「正月十五夜出廻」／法政大学　文学部

書き下し文

「正月十五夜に出でて廻る」

出でざれば只愁ひ感まん、出遊して将に自ら寛めんとす。貴賤儔匹に依る、心復た殊に歓ばず。

漸く老いて情厭き易く、之かんと欲するも意先づ闌し。却り還りて児女を見れば、語らずして鼻辛酸たり。

去年は母と与に出で、母を学て朱丹を施す。今母は下泉に帰すれば、垢面衣に完きもの少し。

爾の各々尚ほ幼きを念ひ、涙を蔵して看るに忍びず。灯を推し壁に向かひて臥せば、肺腑に百憂攢る。

現代語訳

「元宵節の晩、出かけて戻る」

（家々が提灯を飾り、皆がそれを見に出かける元宵節の晩に）出かけなければ、ただもう憂鬱になり悲しみが募るばかりである。

出歩いて自分の心を落ちつかせようと思って出かけた。

（外では）身分の高い人も低い人も皆連れ立って歩いている。（それを見て）私の心はまた全然楽しい気分でなくなった。

だんだん年をとってきたので、気持ちが厭きやすくなり、いろいろな所に行ってみようとしても、まず面倒臭さが先に立つ。

家に帰って子供たちを見ると、言葉も出ずに鼻がつーんとしてくる。

去年の元宵節の晩には、（子供たちは）母と連れ立って出かけ、母の真似をして口紅を塗ったりしていた。

今年は母親が黄泉の国に行ってしまったので、（母のいない子供たちは）垢だらけの顔で、着ている服はぼろぼろだ。

それぞれまだ幼いお前たちのことを思うと、涙があふれてきて見ているのに堪えられない。

灯をよけて壁に向かって横になると、体の奥底にはかりしれないほどのつらさがたまってくる。

解答

問1　3　　問2　(イ)　　問3　(ウ)　　問4　12

問5　母亡き子らを憐れんで流した涙を子らに見せまいとしたから。〔28字・解答例〕

解説

問1　五言古詩。第2句に「出遊(シテ)」とあり、第7句に「却(かへリ)還(かへリテ)見(レバ)二児女(ヲ)一」とあるから、この間の句から探す。第7句以降は、家に帰ってからの描写である。第5句には「情」、第6句には「意」という語があることから、この両句は、作者の内面描写をしており、「元宵節の夜の雰囲気」という客観描写ではない。したがって、第3句か第4句のいずれかになるが、第4句は「心」が主語となっていてこれも作者の内面描写であるから不適。第3句「貴賤依二儔匹一」を、下の(注)をもとに解釈すると、「身分の高い人も低い人も連れ立って歩く」となる。これは客観描写で、「元宵節」という節句の日の夜の雰囲気に妥当する。正解は3。

ちなみに、「元宵節」は、陰暦正月十五日の夜に行われる中国古来の祭である。この夜、家々は、門などに綵(さい)（赤い布や紙）を飾り、提灯をかけ、人々は連れ立って、それを見て歩きながら祝うのである。

問2　「殊」は「ことに」と訓読する副詞。否定詞「不」の上に位置していることに着目。「副詞＋否定詞」の構文だから、全部否定（全否定）である。「否定詞＋副詞」ならば部分否定。全部否定の訓読は、「副詞＋否定詞」を冒頭からそのまま訓読すればよい。したがって、(イ)「ことによろこばず」が正解。

(ウ)「ことさらに」、(オ)「ことごとには」という読み方は、「殊」にはない。(エ)の「ふくわんなり（ふかんなり）」は、ここであえて「不歓」を熟語として読む必然性がない。「歓」は「よろこぶ」と動詞で読んだ方が良い。(ア)は「ことには」と係助詞の「は」が付いているが、これは部分否定の読み方。傍線部(2)が「不殊歓」ならば、こう読む。

問3　「鼻辛酸」自体の解釈を問う問題というよりも、主語を答えさせる問題。漢詩の「二句一文」の原理（漢詩は、二句でひとつの意味を表すという原理）を使えば簡単に解ける。第7句の「却還見二児女一」の「見」の主語は、作者梅堯臣だと判断できる。つ

まり、主語は「私」なのである。すると、第8句の「不レ語」の主語も同じく「私」だと判断できる。したがって正解は「私は鼻がつーんとしてきた」の㋒。

問4　ここでも、漢詩の「二句一文」の原理を利用できる。傍線部(4)の第10句は、直前の第9句から続く、「去年」の子供たちの様子なのである。「与レ母出」とあるから、去年は母親がいたのである。

さて、設問文の「現状」という語から、傍線部(4)直後の、「今」で始まる第11句が注目される。「今母帰下泉」と書かれていて、下の（注）から、「下泉」は「死者の世界」のことだから、今は母は死んでいることがわかる。第9句に続く第10句に「去年」の子供たちの様子が書かれていたのだから、第11句に続く第12句の「垢面衣少レ完」が、子供の「今」の様子＝「現状」である。

「垢面」は（注）にある通り「垢だらけの顔」であり、「衣少レ完」は、「ちゃんとした服が少ない」という意味である。今年は、母がいないせいである。

問5　第15句は、第13・14句に続く部分であるから、この二句をまず見てみる。第13句は、「尚幼」から、「爾」（親称の二人称）が、作者の子供たちへの呼びかけであることがわかる。次に第14句は「蔵レ涙」から、作者が涙を流して泣いていることがわかる。「不レ忍レ看」の「看」の対象は、第13句の「爾」、すなわち幼い子供たちのことである。これをふまえて第15句の解釈に取り組もう。

「推レ灯」は、「灯を手で推しやって」と直訳できるが、どういうことだろうか。「灯」はそもそも何かを明るく照らして物を見えるようにする道具である。すると、「灯を手で推しやって」とは、自分から「灯」を遠ざけているのだから、「灯」とは逆の効果が働くことになる。つまり、暗くするのが「推レ灯」のねらいである。この行動の意味は、続く「向レ壁臥」でより一層はっきりする。「向レ壁」とは、自分の顔を壁に向けるのだから、他の者から自分の顔を見えなくする効果がある。すると作者の梅堯臣は、自分のまわりを暗くしたり、壁の方を向いたりして、自分の顔を他の者から見えないようにしているのである。どうしてそんなことをしたのかは、前の二句から判断できる。涙を流しているのを悟られまいとしているのである。もちろん子供たちから。この二点が書かれていれば解答としては妥当である。求められている字数から、「幼くして母をなくした、哀れな子供たちのことを考えて」も入れるとなお良い。

●メモ●

5章

【問題】（演習）

出典…鷲田清一『ちぐはぐな身体』／東京経済大学　02年

文章略解

自分の身体に関して知り得ることは一部に限られており、我々はその断片的な身体知覚を繋ぐことにより全体像を想像するしかない。そこでひとは、皮膚感覚を活性化することで見えない身体の輪郭を浮き立たせたり、じぶんの存在を社会的に意味づけたりすることで、この〈像〉としての身体のもろさ、〈わたし〉というものの存在の輪郭を補強するのだ。

解答

問1　(イ)＝壊　(ロ)＝起因　(ハ)＝終生　(ニ)＝統御　(ホ)＝心地

問2　(1)＝つな　(2)＝な　(3)＝りんかく　(4)＝かも　(5)＝す

問3　a＝②　b＝④

問4　X＝③　Y＝①　Z＝⑤

問5　Ⅰ＝②　Ⅱ＝④

問6　③

問7　①・④

【問題】（自習）

出典…鷲田清一『死なないでいる理由』／法政大学　04年

文章略解

身体や生命は誰のものかを考える際、身体に対する自己所有権を持つとされる個人の自由と人間存在の社会性との間の齟齬が問題となる。しかしこと身体や生命に関しては、他者との関わりなくしては実体として存在し得ないのだから、つねに社会的存在としてとらえる観点が必要である。

解答

問1　a＝4　b＝5　c＝1　d＝3　e＝2

問2　4

問3　1＝N　2＝Y　3＝N　4＝Y　5＝Y　6＝N　7＝N

問4　2　問5　1

問6　5　問7　2

解説

問1　a　1――製造　2――反省　3――政策　4――制止　5――一斉

b　1――施錠　2――醸造　3――異常　4――献上　5――譲歩

c　1――自責　2――積年　3――昔日　4――筆跡（筆蹟）　5――実績

d　1――容態　2――動揺　3――模様　4――容認　5――凡庸

e　1――聴講　2――構成　3――傾向　4――効能　5――購読

問2　傍線部「同じ論理」の具体的内容は、その前の段落の「個人の自由の問題」――「個人が自由であるとは、個人がその存在、その行動のあり方をみずからの意志で決定できる状態にあるということ」という部分に明示されている。これをおさえた上で、各選択肢の「～から、……」という論理とつき合わせてみればよい。選択肢前半「～から」の部分で、2「いのちが宿る場所だから」3「死んでなくなるものだから」5「身体はじぶんの意志を持っているから」がここでの「論理」と無関係な内容であり、後半部分で1「大切にしなければならない」がダメである。

問3　傍線部が「～にとれば」と、論理的前提を説明した部分であることに注意。この前提からなる帰結が、以下の「家族生活を」云々の部分である。すなわち傍線部を含む一文はこの段落で語られている「（生命・身体が）けっしてじぶんだけのものでない」という指摘の例示である。この段落で語られていることを一言で概念化すれば、「身体・生命の社会性」である。この点から各選択肢の「身」という言葉を検討すればよい。2・4・5の「身」が社会的側面をもった概念であるのに対して、他は個としての「肉体」の意味である。

問4　これも**問2**同様各選択肢の構造が「～のに（にもかかわらず）、……」となっているので、選択肢の前半と後半をそれぞれに検討すればよい。傍線部の「ずれ」の具体的内容は、本文4～11行目の「個人の自由の問題」「（生命・身体が）わたしのもの・じぶんのもの」という観点と、12～18行目の「（身体・生命の）社会性」（**問3**解説参照）という観点との「ずれ」である。したがって、1「臓器提供」云々、3「じぶんで創りだしたわけではない」、4「他人にとやかく言われてしまう」、5「じぶんで思ったとおりのやり方でいのちを絶つのが不可能」の部分がそれぞれ不適切である。

問5　傍線部の「留保」とは「身体の自己所有権」という観念につけられる「留保」である。その具体的内容は、直後の一文「それは、

身体がもし～」以下、次の段落以降で述べられている。そこで語られた内容を前提に各選択肢を検討すると、3「基本的人権の理念」云々、4「他者の身体や生命の助けにつながる場合にのみ認められる」、5「身体を他の身体とのまじわりややりとりの中に位置づけてはならない」は論外である。残った1・2の比較ということになるが、2「身体は物的な対象」に疑問符が付く。筆者は、傍線部直後の「身体がもしもろもろの物的対象のひとつだとするならばたしかにその所有権が云々できるであろうが」という記述から考えても、「身体＝物的対象」という考え方を否定的にとらえていることは明白。

問6　傍線部直後にある「というのも、身体が純粋に物的な対象として現れるのは、それが他の身体との生きた関係を解除されたときだから」という記述から考えれば5「ともに生きる他人との関係から離れて考える」を選ぶほかはない。

問7　本文27行目の「留保」（**問5**解説参照）以下、傍線部までほとんど「一直線」で論理が展開しているので、傍線部でいう「もっとも基礎的な場面」「たがいのいのちを深く交えている」がそれぞれどういう意味であるのかを読み取るのは難しいことではない。「身体そのものははたして所有されるべき物的対象なのだろうか」（28～29行目）、「生命は他人と共同で維持されるもの」「他人との関係から離れて生活というものはなりたたない」（32～33行目）、「ひとの身体と生命は～ひとびとのものでもある」（36～39行目）などの記述から考えれば2を選ぶのも容易なはずである。1「献体や臓器提供」3「基本的人権」4「共同で所有権」5「たがいに意見を交わして」、いずれもこの傍線部の内容としては的外れである。

6章

【問題】（演習）

出典…石田佐恵子『有名性という文化装置』／早稲田大学・00年

文章略解

記号としての衣服が着脱可能であるのに対して、顔かたちやセンスは「その人らしさ」「個性」として、変更のきかないものと考えられがちだが、いまやそれすらも「着替えられる」ものと認識されつつあり、特に女性や青年たちの間では身体や外見を操作する欲望が高まっている。それは言い換えれば、自らの身体そのものを「私」を表示するための記号として扱っていることの現れであり、現代の社会状況は身体の記号化を促進する方向に向かっている。

解答

問1　ロ

問2　Ⅰ＝(ハ)　Ⅱ＝(ニ)　Ⅲ＝(イ)　Ⅳ＝(ロ)　Ⅴ＝(ホ)

問3　顔かたちや着こなし、小物のセンス〔16字〕（29行目）

問4　(ニ)　問5　(ハ)

問6　(ロ)

【問題】（自習）

出典…三浦雅士『考える身体』／学習院大学

文章略解

身体に手を加えることが野蛮で不謹慎なことだと考えられるようになったのは十八世紀の啓蒙主義以降のことであり、それ以前は身体加工こそが人間的・文明的な営みであった。憑依現象に見られるように人間は何にでもなれる存在であり、逆にそこから生じる不安が、個人の社会的位置を確定する技術としての身体加工を成立させた。若者がことさらに自分の身体に手を加えるのは、人間が再び原始時代と同じ不安に苛まれ始めていることの顕れではないか。

解答

問1　1＝不謹慎　2＝発端　3＝簡明　4＝舞踊　5＝標語

問2　ア＝4　イ＝2　ウ＝3　エ＝1

問3　P＝3　Q＝6　R＝5　S＝1　T＝4

問4　憑依

問5　3　問6　4　問7　3　問8　5

解説

問2　ア：「顰蹙を買う」は決まり文句。言うまでもない。

イ：6～7行目、12～17行目において

「親に与えられた身体をことさらに傷つけることはフキンシン」

「身体を傷つけないことこそ文明である」

という啓蒙主義以降の見方を紹介した上で、それとは全く逆の見解、

「身体加工こそ人間の特徴、～文明であるということになる」

「ピアスをしたり、毛髪を特殊なかたちにしたりする若者は、～きわめて人間的であり、文明的である」

を挙げているのがイの直前部分。よって答は「逆説」。

ウ：啓蒙主義以降の時代を生きる我々の「常識的見解」では、憑依現象は未開・野蛮そのもののように見える、というのがウの前後の内容。よって答は「典型」。

エ：「人間は何にでもなれる」という自由を、直後で「何にでもなってしまいかねない」とネガティヴに言い換えている。さらにその直後（36行目）にも「不安」という言葉が用いられていることからも、これは容易。答は「不安」。

問3　接続詞・副詞による空欄補完問題は、

・接続詞を補完する際は、空欄の前後の関係

・副詞を補完する際は、その副詞が掛かるであろう被修飾語（陳述の副詞であればなお容易）

に注目するのが鉄則。念のため各選択肢について確認しておくと、

1　なぜなら　：理由補足の接続詞。直前に「結論」、直後に「理由」がくる。
2　というより：これは接続詞でも副詞でもない。直前の内容を訂正し、直後でベターな言い方に改める際に用いる。
3　だが　　：逆接の接続詞。前後の内容が対立・逆行。
4　だからこそ：順接の接続詞。直前が「原因」、直後が「結論」（つまり1の逆）。
5　すなわち　：同列の接続詞。前後の内容が同内容。あるいは直前の内容を直後で簡潔にまとめる。
6　おそらく　：推量を表す副詞。直後に推量表現がくる可能性が高い。

さて、各空欄の前後を確認すると、

［一昔前］身体加工はフキンシン（×）　→　P　→　［さらにその前］微妙なことになる（△）

前後で見解が異なっているので、逆接の3。

Q　→　大過ないだろう。

直後に推量表現がくるので、推量の副詞の6。

人間の特徴　→　R　→　文明

前後がほぼ同内容なので、同列の5。

S　→　〜ということだからである。

直後に理由がくるので、理由補足の1。

憑依現象　→　T　→　その一形式としてのブヨウ・演劇の発明

前後が因果関係になっているので、順接の4。

問4　傍線部Aの直後が、具体的な言い換えになっている。

「人間はじつは何にでもなれる存在だ」

＝

「狐にでも狼にでもなれる存在、木にでも石にでもなれる存在だ」

人間が、狐や狼になったり、木や石になる・・・、言うまでもなく「憑依」によってである。

問5　傍線部Bに見られる「自己」と「社会」の関係について述べられている箇所としては、まず直前の29〜30行目に目が行くことだろう。

「自分が自分であることを知るには、他人にならなければならない。」

「人間の自己意識の仕組みは、そのまま社会の仕組みに重なっているのである。」

ここだけを見ても俄には意味が理解できないのではないか。そこで、より広く目配りをしてみる。すると、「自己」と「社会」に

ついて述べている別の箇所として、19～20行目が見つかる。

「自分が自分であることを確かめたい」

「社会における自分の位置を明らかにしたい」

これで先の29～30行目の意味もわかるだろう。要するに個人のアイデンティティは、社会的帰属性に由来するということだ。そしてそれを明らかにしたいという願望が生じるのは、傍線部A「人間はじつは何にでもなれる存在だ」からであると述べられている。

これと同内容は、34～35行目にも見られる。

「何にでもなってしまいかねない自分」

←

「あるひとつの何かに固定する」

←

「身体加工の成立」

以上をまとめると、

①人間は何にでもなれる、何にでもなってしまいかねないという不安

←

②社会における位置、自分のアイデンティティを固定したい

←

③身体加工

という流れが見えてくる。これに言及している選択肢は3のみ。

問6　社会的属性が個人を規定する。これが**問5**でみた人間存在の在り方である。それの対極にあるのが**問6**で問われている、啓蒙主義以降の人間存在の在り方である。それについて明記されているのは、傍線部**C**直後の

「人間は生まれたままの姿こそもっとも美しい。」

これは社会的属性云々の前に、人間という存在そのものが原初的・本質的に貴いという考え方である。これをふまえて各選択肢を見ていくと、1と2は、「他者」「社会」「民族」が個人を規定するということであるから、むしろ**問5**で解説した考え方に近いので合わない。3の「自由・平等」「博愛の精神」などは、本文で全く言及されていない。よって答は4。

問7　これは容易。傍線部**D**直後に「原始時代と同じ不安」とある。これは**問5**で触れた「何にでもなってしまいかねない」という不安に他ならない。よって答は3。

問8　これも容易。啓蒙主義以前には、自分が何にでもなってしまいかねないという不安から、社会的存在としての自己を確定するために「身体加工」や「憑依」が見られ、**問7**で見たように、今また原始時代と同じことが起こっているというのである。よって答は5。

L3T/L3TK/L3TF
難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製